信飛国境地帯でのカタツムリと ナメクジの方言分布とその解釈

馬瀬良雄

I はじめに

デンデンムシムシカタツムリ……と小学唱歌で子どもたちに歌われ，彼等の世界の人気者のカタツムリと，これと対蹠的に子どもの世界ではほとんど相手にされることのないナメクジ—信州と飛騨の国境地帯でのこの二つの虫の方言分布を示し，その解釈を試みたい。

解釈の過程で語と体系の問題にも触れ，また柳田国男が『蝸牛考』の中で述べたダイロの成立に関しての見解にも批判を加えている。

ここで信飛国境地帯というのはアルプスを挟む図1のような地域で，信州側は南安曇郡奈川村・安曇村（それぞれ全域）① 東筑摩郡波田村②・西筑摩郡開田村（それぞれ一部地域），飛騨側は吉城郡上宝村・大野郡丹生川村（それぞれ信州寄りの約半分の地域），大野郡高根村（全域）が属している。

① 安曇村は松本平に近い島々谷と奥の大野川とに分かれる。この小論では島々谷，大野川という名称を使うことが多い。

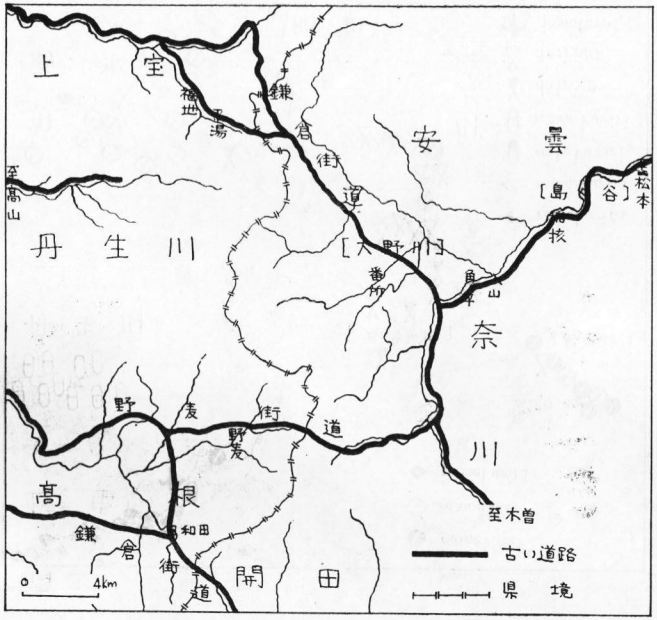
② 波田村に属する集落は，島々谷に1地点あるだけである。

この地域の交通についてかんたんに触れる。古く鎌倉街道が飛騨上宝村から図1に示す経路で信州に通じ，信飛の交流は主としてこの路線により行なわれた。だがこの街道は近世後期野麦街道の開通によりすたれ，信飛交通の主役は野麦街道に移り，野麦街道は明治末まで大いに利用された。松本平で年越し魚として珍重された「飛騨ぶり」はこの道をボッカたちによって運ばれたものであり，また明治時代製糸業の隆盛時には飛騨から女工たちはこの街道を通って信州の工場へやって来，また帰郷した。だが鉄道の敷設はこの地方の交通事情を大きく変えた。交通は鉄道により大きく迂回して行なわれるようになるとともに，野麦街道は廃道同然となった。そしてアルプス両麓の村落は行き止まりの集落となり，街道を通じての彼我の交流はほとんど行なわれなくなった。

飛騨高根村日和田から峠越しに信州開田村へ通ずる道も，やはり鎌倉街道と呼ばれ，野麦街道開通以前は大いに利用された。現在も高根村，特に同村日和田と開田村との交通はこの道によって行なわれている。なお現在信飛の交流は，鉄道によるほか，松本—中之湯—平湯—高山のバス連絡が夏の間だけ行なわれている。

この地域で 1962 年カタツムリとナメクジの項目を含む方言調査

図1



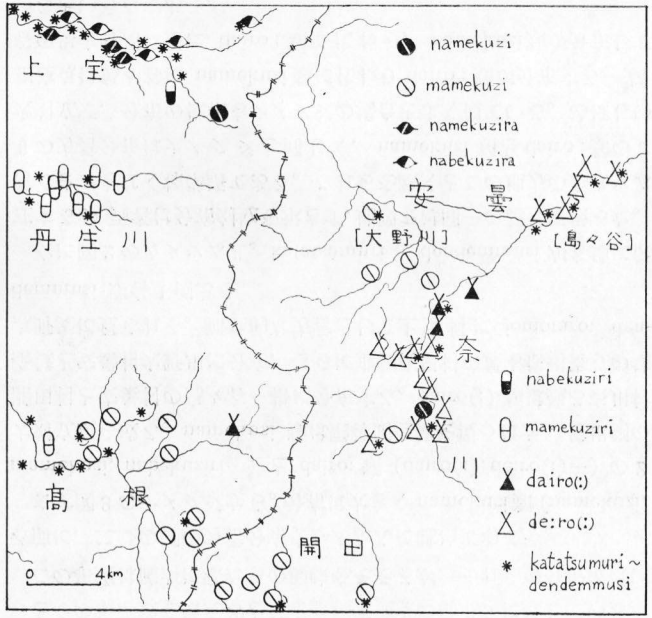
を行なった。

調査地点は5万分の1地形図所載の全集落を予定したが，その集落がなくなっていたり，適当な話者が得られなかったりして調査のできなかった集落が数集落ある①。

① 調査集落名はここでは省く。詳細は馬瀬「方言意識と方言区画―信飛国境地帯を例に―」(『日本の方言区画』所収)，また馬瀬「方言意識について」(『長野短大紀要』18所収) 参照。

調査対象は1集落につきその土地生え抜きの老人 (60歳以上) と中学生各1名。ただし小論では老人の資料を中心に扱った。調査員は馬瀬のほか，清水郁 (東京区立足立第一中学校教諭)・稲垣滋子 (国際キリスト教大学助手)。一部地点を鏡味明克 (岡山大学講師) が担当した。

図2



II　カタツムリとナメクジは同じ虫か？

カタツムリの分布図（図2）とナメクジの分布図（図3）を一見して，非常に奇異に感ずる事実がある。それは二つの分布図がとても似ているということである。つまり，私たちの常識からするとハッキリ違う二つの虫を，同じ方言で呼ぶ集落が多いのである。今ざっとその集落数を数えると何と全調査地点の約 3/5 に達している。

この事実は確かに私たちの興味をそそるが，それらの分析にはいる前に，二つの図の方言分布をかんたんに眺めておこう。

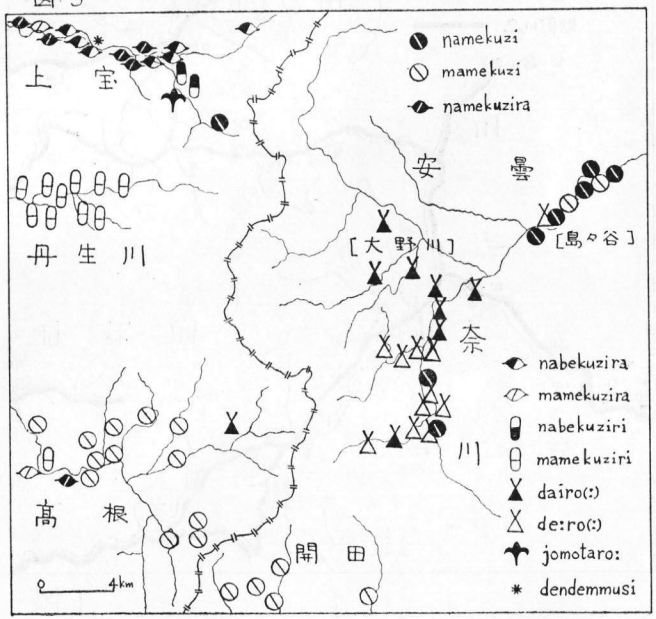
まず図3のナメクジから。分布は大きく namekuzi 類（namekuzi, mamekuzi, nabekuziri…）と dairo: 類（dairo(:), de:ro(:)…）の2大対立から成る。namekuzi 類は飛騨側全体を覆うほか，信州側の開田村と安曇村の島々谷一帯に分布する。dairo(:) 類は残る奈川村全域と安曇村大野川に分布，さらに飛騨高根村の最も信州寄りの地点野麦（ノムギ）に見られる。孤立的な方言として上宝村に jomotaro:, dendemmusi が各1例ある。

次に図2のカタツムリ。katatsumuri と dendemmusi が各地に散在するが，両者は分布対立を示さず，地図では同一の記号で扱った。言うまでもなく標準語である。これらを除くとこの地方のカタツムリの方言分布はナメクジと同じく，namekuzi 類と dairo：類の2大対立で，分布の様相もナメクジの場合とよく似ている。めぼしい相違点は島々谷に namekuzi 類に代わり dairo：類が分布する一方，谷の奥大野川は逆に dairo：類に代わり，namekuzi 類が分布しているという点である。

先に述べたように，二つの虫を同じ方言で呼ぶ集落は多く，全体の 3/5 に及んでいる。今これらの集落はこの二つの虫をどのような名称で同じものとしてとらえ，残り 2/5 の集落ではどのように異なる名称でとらえているか，その対立の姿を図4で示す①。

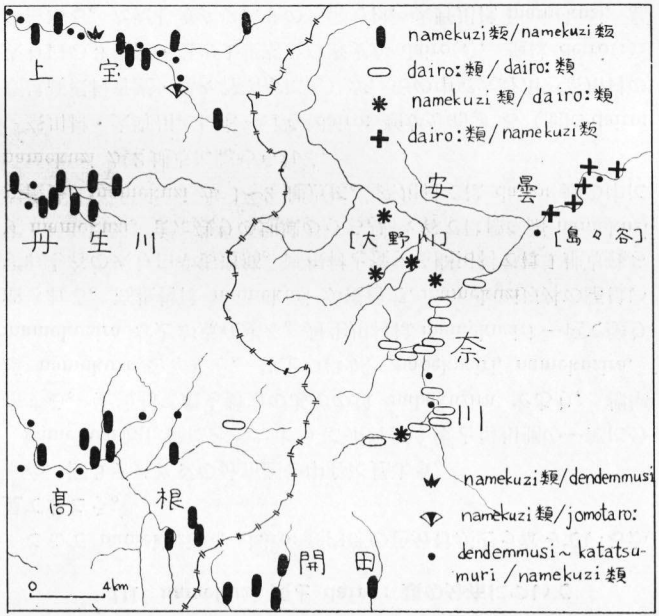
① 図では次の操作が施されている。カタツムリ・ナメクジの両方言を比較し，一方または両方に併存形のある場合，両者に共通の方言があればそれを採り，他は無視する。

図 3



二つの虫を同じ名称で呼ぶ集落を見ると，飛騨側から信州開田村にかけ両者を namekuzi 類でとらえている集落が多く，信州側は dairo: 類としてとらえている集落が多い。残りの 2/5 の集落ではどうか。katatsumuri～dendemmusi/namekuzi という標準語による対立も認められるが，それは 1 個所しかない。多いのは katatsumuri～dendemmusi/namekuzi 類（標準語 namekuzi を除く）という対立，つまりカタツムリの方が標準語化し，ナメクジの方は在来の方言という型である。ここにはカタツムリの方はなじみ深いのに対し，ナメクジはなじみが薄く，namekuzi 類は標準語と形態がよく似ているなどの事情が働いている。

図 4



信州側は dairo: 類/namekuzi 類が島々谷に認められ，この逆の対立 namekuzi 類/dairo: 類がその谷の奥大野川に分布する。後者は奈川村の奥にも 1 地点認められる。

このほか namekuzi 類/dendemmusi，namekuzi 類/jomotaro: が各 1 例ずつ認められる。

このようにこの二つの虫を namekuzi 類であれ dairo: 類であれ，同じ名称で呼ぶ集落の多いことに奇異の感を抱くが，この二つは生物学上から見ると互いに非常に近い関係にあることが分かる。いま詳細は省くが，両者はともに腹足綱柄眼目の軟体動物に属しており，殻の有無が両者の主な差となっているのである。

こうしてみると，この地域で両者を同じ名称でとらえていても決して不思議ではない①。また調査のさい，話者の中には，カタツムリは雄でナメクジは雌だとか，小さいうちがカタツムリで大きくなるとナメクジになるなど，いろいろ珍説を披露してくれる者がいたが，それほど驚くには当たらないわけである。

① 二つの虫を同じ名称でとらえているのは単にこの地方に限らない。柳田国男『蝸牛考』など参照。西欧でも，たとえばドイツ語の Schnecke（カタツムリ）と Schnegel（ナメクジ）とは同じ語源だという。またナメクジを nackte Schnecke つまり裸のカタツムリと称しているのを見よ。この関係については英語やフランス語などでも同様。

III　namekuzi 類と dairo: 類の分布について

ここで namekuzi 類，dairo: 類内部の色分けがどうなっているか見ておこう。

今，図3ナメクジの分布図を中心に見よう。

namekuzi 類は前に述べたように飛騨側全体と信州側の一部に分布する。上宝村で最も勢力のあるのは nabekuzira であり，標準語 namekuzi を除くと，以上のほか，nabekuziri，namekuzira，mamekuzira などが点在する。丹生川村は mamekuziri 一色で塗り潰される。高根村は mamekuzi が優勢で，mamekuzi以外の語はいずれも谷の入り口や街道筋。高根村と接する開田村では1地点残らず mamekuzi。また残りの地域のうち，島々谷では標準語 namekuzi が優勢，mamekuzi が 1〜2 地点に。奈川村では dairo: 類の中に namekuzi が2地点に認められる。

奈川村・大野川にはもっぱら dairo: 類が分布する（他に dairo: 類は高根村野麦・島々谷稲抜（イネコキ）にも）が，その中で大野川と奈川村の入り口の3集落・奥の1集落及び野麦が dairo(:)，他は de:ro(:) が占める。ただしカタツムリの方言では，大野川は mamekuzi，島々谷は de:ro(:) が代わる。

IV　namekuzi 類と dairo: 類はどういう関係にあるか？

dairo: 類は1地点を除きもっぱら信州側に分布し，namekuzi 類は主として飛騨側に分布するが，両者はどういう関係にあるか。たとえば昔から飛騨側は namekuzi 類，信州側は dairo: 類が分布し，アルプスによって2分されていた—こう取るには分布は複雑である。次に両者の関係を少しくわしく考えてみよう。

（1）　島々谷の namekuzi 類と dairo: 類

まず島々谷を見よう。この谷では一般にナメクジの方言は namekuzi 類，カタツムリの方言は dairo: 類で呼ばれ，両者は別の名称を持つ。しかしこの姿がこの谷の古い姿だと断定するのは早計である。

いまナメクジの図で，島々谷稲抜の namekuzi 類と併存する dairo: 類に注目しよう。島々谷の dairo: 類と namekuzi 類で，前者が後者よりも新しいものとするならば，それは奈川方面から下りて来たものと推定される。しかし稲抜が政治・経済・文化などの面で松本方面の影響下にあること，さらに namekuzi 類の多くが標準語 namekuzi であること—この二つを考え合わせると，上の推定には難がある。逆に dairo: 類はカタツムリとナメクジに共通の方言として松本方面からはいって来たのではないか。つまり dairo: 類は諸潮流の優勢な松本方面から島々谷へはいり，奈川村へ進み，そこで二つに分かれ，一隊は奈川を埋め尽くし，さらに野麦峠を越え，最前衛は飛騨高根村野麦まで達し，別の一隊は北上して大野川へと進出した。dairo: 類の後から標準語 namekuzi がナメクジの名称として，やはり松本方面から島々谷にはいってきて谷を埋めた—こう考えるのである。そのさい島々谷の少数の mamekuzi をどう見るかは後で触れる。

① もちろん標準語の直輸入も考えられる。このことは他の地域でも同じ。

こう考えると，島々谷も以前はカタツムリとナメクジを名称の上

で区別せず，奈川同様 dairo: 類が覆っていたと見ることができる。

（2） dairo(:) と de:ro(:)

dairo(:) と de:ro(:) とはほぼ自己の分布の領域を持っている（図2，図3）。両者はどういう関係にあるか。これに対し二つの考え方があろう。

a. 最初 de:ro(:) が分布し，後に「誤った回帰」により dairo(:) となった。

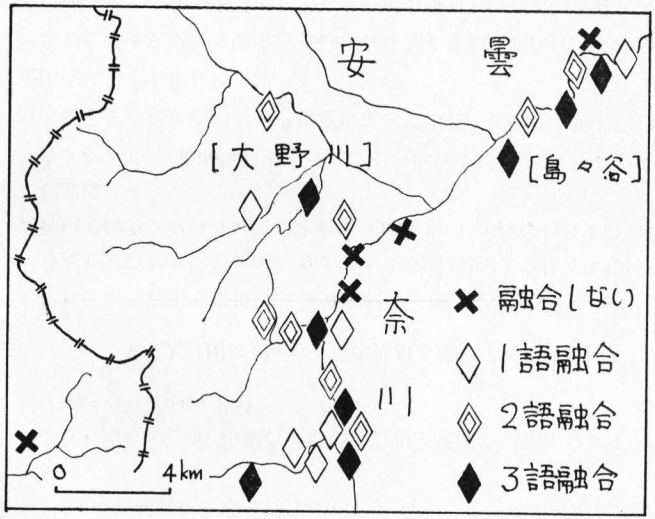
b. 初め dairo(:) が分布したが，-ai>-e: の音韻変化により，多くの地点で de:ro(:) となった。

事新しく言うまでもなく，柳田国男『蝸牛考』では，上のa説が主張され，de:ro は「出ろ出ろ」という動詞の命令形に由来する童詞がその発端であり，dairo は de:ro の「誤った回帰」によって成立したものであると述べられている。私は氏のこの説には種々問題点があると考えるが，まずこの地域ではどちらの考え方が妥当であるか検討しよう。

いわゆる連母音 -ai の発音がどのようであるかについて，1963年「赤い・書いた・沸いた」の3項目を調査したが，当該地域についてその結果を dairo: 類を答えた地点についてのみ図に示そう（図5参照）。この図と，図2，図3を比較してみよう。飛騨高根村野麦と奈川村入り口の3地点①の dairo(:) は連母音 -ai の非融合の地点と一致している。だが大野川では dairo(:) 地域でありながら -ai>-e: の地域となっている。

① 集落名で言うと入山（ニュウヤマ），角ケ平（ツノガダイラ），田ノ萱（タノカヤ）だが，この3集落は奈川村の中でも特異な方言を持ち，信州側にありながらかなり飛騨的な要素を持っている。

図5



まずa説から検討しよう。

もし dairo(:) が柳田説のように de:ro から生まれたとするならば，大野川の dairo(:)，奈川村奥に1個所認められる dairo(:) はその可能性ありと言える。それは次の2点が満足されるからである。一つはこの地域が -ai の融合地帯である点，他は融合地帯であると言っても，全集落3項目全部が融合してはいないところから，-ai>-e: の音韻変化がすでに活動力を失ないつつあることが分かる点である①。

① もし -ai>-e: の音韻変化が隆盛時にあれば，-ai という連母音

を持つことがなく，従って「誤った回帰」を起こすことは考えられない。なお，「誤った回帰」は，理論的には，この音韻変化の衰退期だけでなく，発生期にも起こりうる。

しかし，一方奈川村入り口の3集落，飛騨野麦は非融合の地点であり，ここでは従って「誤った回帰」の起こる可能性は少ない。だが，その可能性が全くないと言うのではない。たとえば融合地域から -e: を含む語が非融合地域に受け入れられたとき，非融合地域の人が，-ai の融合・非融合について意識を持ち，それが融合地域からはいった語であることを知っている場合には，-e:>-ai という「誤った回帰」を犯すことは考えられる。しかしA地のある語がB地に受け入れられる場合，A地の政治・経済・文化などの諸潮流がB地よりも優位にある場合が多い。従って de:ro(:) が取り入れられたとき，直ちにこれを誤りとして dairo(:) とすることは普通には考えられない。またかりに何等かの理由で大野川で de:ro(:) が dairo(:) となったとしても，その dairo(:) が奈川村に下り，3集落に勢力を植えつけることに成功したと考えることは，諸潮流の方向から考えて自然ではない。むしろ奈川村入り口の dairo(:) 地域から dairo(:) が大野川へと拡がったと見る方が自然である。

以上からa説つまり柳田式の考え方は少なくともこの地域にはあてはまらない。

次にb説。-ai の融合により dairo(:) から de:ro(:) が生まれたとすると，奈川村入り口の3集落と飛騨野麦の dairo(:) は，いずれもその地が非融合の集落であるところからかんたんに説明がつく。また奈川村の残りの地域，それから島々谷の dairo: 類が de:ro(:) である点も，それが -ai の融合地域であるから当然と言える。奈川村奥の dairo は，de:ro が dairo となったものではなく，音韻変化により大勢が dairo(:)>de:ro(:) となる中にあって依然抵抗を続けている状態の証左だと考えることができる。

しかし今度は大野川が -ai の融合地域であるにもかかわらず，ナメクジの方言が全地点 dairo(:) であって de:ro(:) でないことが問題となる。が，私はこの点次のように考える。大野川のナメクジの方言 dairo(:) は，その地で -ai>-e: の音韻変化の活動力が失なわれた後，あるいはそれが終末に近づいたころ，奈川村の dairo(:) 地域から伝播して行ったものである。そのために大野川の dairo(:) は -ai>-e: の音韻変化を蒙って de:ro(:) となることがなかったのだ，と。

こう考えると，-ai の融合地域の大野川全集落で dairo(:) の行なわれていることの説明がつく。

V　大野川に dairo(:) の拡がる前は？

それなら大野川で奈川村から dairo(:) の拡がる前はどんな方言が分布していたか。ちょっとカタツムリの図（図2）を見て欲しい。大野川ではカタツムリの方言として mamekuzi が行なわれている。ここでは，

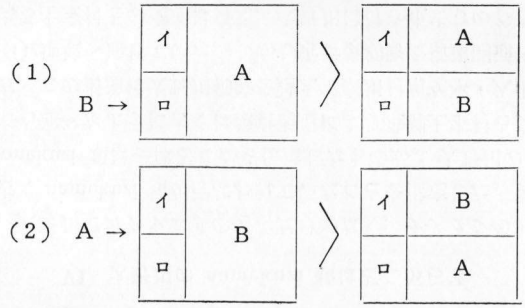
カタツムリ—namekuzi 類　ナメクジ—dairo: 類　という切り取り方を示し，島々谷の場合とは逆になっている。この切り取り方は全国的に見ても珍しいと思う。

さてこのカタツムリの方言 namekuzi 類こそが dairo(:) の拡がる以前，ナメクジの方言としても大野川を覆っていたものと私は考える。この間の事情を敷衍して述べれば次のようになる。この地方

では従来カタツムリとナメクジは名称の上で区別がなく，両者に共通の方言として namekuzi 類の mamekuzi が分布していた。そしてその後からやはり両者に共通の方言として dairo: 類の dairo(:) がはいって来たが，dairo(:) はナメクジの方言として定着し，従来の mamekuzi は意味分担の範囲を縮小してカタツムリだけを受け持つようになった。

しかしここで疑問が起こるかも知れない。どうして谷の入り口島々谷と奥の大野川とで二つの虫の名称を逆のタイプとして捉えたか。これは島々谷と大野川とでは条件が全く違うからと考える。今図6の（1），（2）の図式によって示そう。島々谷は（1）に該当する。従来イ・ロ（カタツムリ・ナメクジ）の共通の方言として A (dairo: 類) が行なわれていた。そこへ新しくロ（ナメクジ）の方言として B(namekuzi 類) がはいって来た。そこで従来 A (dairo: 類) の持っていたロ（ナメクジ）の意味の範疇を B (namekuzi 類) に譲った。

図 6



これに対し大野川の方は（2）に属している。古くイ・ロ（カタツムリ・ナメクジ）の共通の方言として B (namekuzi 類) が行なわれていた。そこへイ・ロの共通の方言として A (dairo: 類) がはいって来た（この点が島々谷と異なる）。が，A (dairo: 類) は旧勢力 B (namekuzi 類) を完全に駆逐できず，比喩的なことばを借りれば，新旧勢力は和議を結び，旧勢力 (namekuzi 類) は自己の持つ意味分担を縮小してイ（カタツムリ）だけを分担するようになり，ロ（ナメクジ）の方は新勢力 (dairo: 類) に譲った。

それならば，どうして大野川ではイ—B，ロ—Aとなって，イ—A，ロ—Bという型を作らなかったか。語と意味との結びつきが恣意的だという点からすれば，どちらの型を取ろうと構わないわけだが，私はこの地方でイ—B，ロ—Aという型を取った底には，なお次の事情も影響していると思う。大野川番所（バンドコ）の話者は，カタツムリの方言として mamekuzi を，ナメクジの方言として dairo: を答えたが，私が「カタツムリの方言としても dairo: を使わないか」と質問したのに対し，「使わない」と答え，その理由として「カタツムリは小さいから mamekuzi，ナメクジの方は大きいから dairo: だ」と説明している。この話者では，カタツムリの方言 mamekuzi には〈mame（豆）＝小さい〉，ナメクジの方言 dairo: には〈dai＝大きい〉という語源意識が働いている。もしもどちらの型の選択も自由であるならば，語源意識の支えのある方をとるのが自然である。このように見ると—もちろん大野川地域の全地点で上記の語源意識が確認されたわけではないが，—カタツムリとナメクジの名称のとらえ方が大野川と島々谷とで逆になっていても，決して不思議ではない。

VI　大野川の namekuzi 類はどこから？

今，大野川でカタツムリの方言だけでなく，ナメクジの方言としても古く namekuzi 類が行なわれていたことを推定した。するとこの namekuzi 類は一体どこから伝播したものか。大野川の交通は，始めにも述べたように古くは鎌倉街道により飛騨上宝村と交渉を持つ一方，この街道は大野川祠峠を越えて奈川村角ケ平・入山などの dairo(:) 地域へ通じていた。しかし近世後期野麦街道開通後この街道による上宝村との交通は衰え，大野川は行き止まりの谷となってしまった。

さて，飛騨上宝村で優勢に行なわれる方言が nabekuzira, nabekuziri…であり，大野川に行なわれるカタツムリの方言が mamekuzi である点，さらに上宝村と大野川の交流が久しく絶えていることを考えると，大野川の mamekuzi を上宝村の nabekuzira…とを直接結びつけることには危険が伴なう。

一方島々谷や奈川村に点在する mamekuzi に目をつけよう。そして奈川村の奥でも1地点，カタツムリとナメクジの名称が大野川と同じく，カタツムリ—namekuzi 類，ナメクジ—dairo: 類である点に注意しよう。このように見ると，大野川の mamekuzi はこれらの地域に今は点在するに過ぎない mamekuzi と関係を持つ蓋然性が強い。

ここで前に触れずにおいた島々谷・奈川村の mamekuzi に立ち帰ろう。前に島々谷では現在カタツムリ—dairo: 類，ナメクジ—namekuzi 類という対立をするが，それ以前はナメクジの方言としても dairo: 類が覆っていたであろうと述べた。が，その際 2〜3 の地点の mamekuzi については触れなかった。私はこれらの mamekuzi の多くは—その蓋然性を全く否定するものではないが—標準語 namekuzi から民衆語源によって mamekuzi になったのではないと思う。私は次のように考える。「dairo: 類の拡がる以前，カタツムリ・ナメクジの共通の方言として mamekuzi が分布していた。そこへ新しくやはり両者を区別せずに dairo: 類がはいって来，そのために mamekuzi はすでに滅亡寸前にあった。その時点で新しくナメクジの名称として mamekuzi と同類がはいって来たので，古くからあって衰滅に向かっていた mamekuzi は 2〜3 の地点でナメクジの方言として復活した」と。

また奈川村はナメクジ・カタツムリの両方言とも現在 dairo: 類の占有するところだが，そこここに点在する mamekuzi，さらに奈川村の奥での大野川と同じカタツムリ—namekuzi 類，ナメクジ—dairo: 類という型などを考え，島々谷の古い時代の推定を参照すると，この村でも1時代前はカタツムリ・ナメクジに共通の方言として mamekuzi が行なわれていたという推定を可能にする。

以上の推論から，現在も mamekuzi の分布する木曽開田村は言うに及ばず，島々谷・大野川，奈川村全域—つまり信州側全域—は，かつてカタツムリ・ナメクジの共通の方言として mamekuzi が分布していたことが明らかになった。そうすると mamekuzi は古く飛騨高根村の mamekuzi と提携して信飛国境地帯きっての大勢力だったことになり，また信飛国境地帯は古く両者に共通の方言として namekuzi 類が隅々まで覆っていたことになる。

VII namekuzi 類の語相互の新古その他について

次に namekuzi 類相互の関係について述べよう。

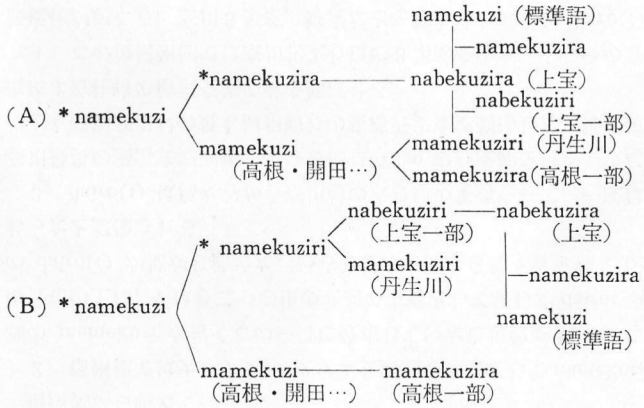
飛騨上宝村で最も勢力があるのは nabekuzira である。ここでは〈鍋・鯨〉，つまり鍋をはい回るクジラに似た動物という語源意識が働いていると思う。しかしこの nabekuzira も標準語 namekuzi の影響を受ける将来が予想される。標準語 namekuzi や namekuzi と nabekuzira との混淆と思われる namekuzira がそれを物語る。一方，谷の奥の2地点に見られる nabekuziri は，nabekuzira よりも古い方言であるのか，あるいはその2地点が間道ながら丹生川村との古い交通路にあたっていたことを考えて，nabekuzira と丹生川村を隅なく埋めている mamekuziri との混淆であるのか，この分布からはハッキリした判定は難しい。しかしいずれの場合にも，上宝村福地（フクジ）の話者が述べたような語源意識が，この方言 nabekuziri の意味の支えとなっていることは明かであろう。この話者はカタツムリの方言として nabekuziri を答えたが，次のような説明を加えている。この虫は生きているうちこそ柔いが，死んで乾くと恐しく固くなる。鍋の取っ手の穴の中につまった土など取るには，釘などではなかなか取れないが，この虫の干したのだととても具合よく取れる。だから nabekuziri（鍋・くじり）というのだと思う，と。

上宝村の南の丹生川村は1地点残らず mamekuziri が覆っている。

その南の高根村から開田村にかけては mamekuzi が圧倒的に多い。特に開田村は全地点 mamekuzi である。高根村では mamekuzi 以外の語は谷の入り口や，現在の街道筋に行なわれている。

mamekuzi 以外の方言 mamekuziri，mamekuzira について触れると，mamekuziri は丹生川村のそれと出自を同じうすると考えられ，mamekuzira は -kuzi の意味を補強するためにこの地で発生したものとも，あるいはよそから輸入されたものとも分布図からは容易に判定しがたい。

各谷で優勢な nabekuzira，mamekuziri，mamekuzi などの諸語相互の関係の正確な読み取りは．分布図からは必ずしも期待できないが，これらがいずれも同一方言からこの地で発生したとすると次のような推定が可能であろう。しかしその場合も，（A），（B）どちらがこの地域の分布の解釈としてより妥当であるかは，早急には決められない。



今は namekuzi を原型と考えて，そこからこの地域内で他の諸語が生まれたと仮定して上の系統図を作ったが，実際にはそうではなくて，他の中心から侵入者として他の諸語のはいって来た蓋然性も

十分あり得る。

VIII　孤立的に行なわれる諸語について

（1）　ナメクジの方言 dendemmusi

図3のナメクジの分布図で1個所だけに行なわれる dendemmusi は，話者の単なる記憶違いや調査者のミスだと考えるのは適当ではない。カタツムリとナメクジを同じ名称で呼んでいる場合，カタツムリの名称として新しく dendemmusi がはいって来た場合，それをナメクジの方言として取り入れてしまうことは十分考えられることだからである。

（2）　ナメクジの方言 jomotaro:

上宝村福地に1地点だけに行なわれているナメクジの方言 jomotaro: は，全国にその類例がない。これが間違いでないことはその後の 1966 年の調査で確められた。しかしこの語は少年層の調査では現われない点からみても，この土地では古いものらしい。だがどのような経緯でこの地に行なわれるようになったかは明かにすることはできない。jamotaro: の -taro: は「太郎」で，たとえばシラガタローの－タローと同じく動物名に認められる一つの典型に属するものと考えてよいだろうか。また jomo- は伊豆大島のカタツムリの方言 jamo:zu などと関連があるだろうか。あるいは富山県礪波（トナミ）地方の雪沓の方言 jomotaro: と何等かの繋がりがあるのだろうか。細かな点は分からない。

IX　終　わ　り　に

今まで述べたことから，信飛国境地帯でのカタツムリとナメクジの方言の史的再構成をしてみよう。

1　古くこの地方一帯に二つの虫は区別して呼ばれることなく，共通の名称 namekuzi 類があまねく覆っていた。

信州側から眺めて行こう。

2　信州側ではナメクジ・カタツムリ共通の方言として namekuzi 類の mamekuzi が古くこの一帯に分布していたと想像される。この分布の上に，やはり二つの虫の共通の方言として新しく dairo: 類の dairo(:) が拡がり始めた。恐らく松本方面から島々谷を経て伝わったと想像される。

3　dairo(:) は島々谷から奈川村の入り口の集落を経て，一隊は奈川最奥の集落まで到達し，さらに 1672 m の野麦峠を越え，少なくとも飛騨高根村の最も信州寄りの集落野麦まで到達した。野麦街道による往時の信飛交流の跡を偲ばせる。

4　この後信州側では奈川村入り口の3集落を除き，-ai>-e: の音韻変化が起こり，奈川3集落，野麦などを除き dairo(:) は de:ro(:) となった。

5　この音韻変化が安曇村大野川で終了した後，あるいはほとんど行なわれなくなったころ，奈川入り口の入山・角ケ平方面から dairo(:) は大野川へと進んだ。だが dairo(:) はその地を前から占有していた mamekuzi を自己の支配下に置くことができず，従来の mamekuzi はカタツムリの，また新来の dairo(:) はナメクジの方言としてそれぞれ意味の範囲を分け合うこととなった。

6　さらにこの後から最も新しい勢力として，標準語としての資格を持つ namekuzi がナメクジの名称として島々谷を遡る。その結果島々谷ではカタツムリ― dairo: 類，ナメクジ―namekuzi 類とい

う対立を持つようになる。さらに標準語 namekuzi はナメクジの方言として他の地域にも点在し始める。

7　標準語 katatsumuri, dendemmusi がカタツムリの名称としてあちこちに姿を見せ，数地点で旧勢力と共存し，また数地点で旧勢力と交替し，将来の方向を予知している。

次に飛騨側。

8　飛騨側全体は両者に共通の方言としてほぼ namekuzi 類が覆っているが，各谷でそれぞれ異なる分布が認められる。

9　上宝村では nabekuzira が多く，また一部に nabekuziri が分布する。この両者の関係は即断することはできない。丹生川村はもっぱら mamekuziri。高根村では mamekuzi が分布し，これがこの谷の古い方言と推定される。この mamekuzi は信州開田村と連繋するだけではなく，古くは奈川村，安曇村と結び合う大勢力であった。

10　ただ nabekuzira, mamekuziri, mamekuzi など相互の新古関係は分布だけからははっきりしないが，Ⅷで行なったような推論が可能である。

11　カタツムリでは標準語 katatsumuri, dendemmusi の浸透がかなり行なわれ，namekuzi 類は次第に衰退しようとしている。

12　ナメクジでも標準語 namekuzi の進出またはその影響（たとえば namekuzi と在来の方言との混淆など）はあちこちに認められるが，それはカタツムリの場合ほど著しくない。それは在来の方言 namekuzi 類が標準語 namekuzi と形態の近いことによるところが大きい。

（付）dairo(:) について

dairo(:) を童詞「出ろ」の「誤った回帰」によって生まれたとする柳田説が，信飛国境地帯で受け入れられないことは先に述べた通りだが，その他の地域でも柳田説で解けるかどうかはなはだ疑問に思う。私は音韻変化の結果 dairo(:) から de:ro(:) が生まれたとするb説を，この地方だけでなく，dairo: 類の行なわれている他の地域でも検討すべきであろうと思う。その際 dairo: 類は文献に出るダイラウに由来すると考える。『本朝食鑑』(1697年) に次の記載がある。

…一種有全似蛞蝓而無斑文，色亦淡灰色，身軟於蛞蝓，梅雨秋霖時，生於人家卑湿地，相聚如蛆，其涎尤多，此亦蛞蝓之類而不食之，俗称陀伊良宇也，（同書十二虫の「蛞蝓」の項，『古事類苑』動物十五虫下による）

このナメクジの一種の名称ダイラウが，dairo(:) として，また音韻変化により de:ro(:) として，ナメクジの名称ないしカタツムリの名称に，あるいは両者に共通の名称として用いられていると考える①。

① ただこのことについては「デーロとダイロ」(一)（『可里婆禰』6輯，信大文学研究会，1961年）で述べ，またその続篇で述べる予定なのでここではこれ以上触れない。

〔追記〕 小論は1965年5月都立大学方言学会で発表したものに加筆したものである。席上多くの方から有益な助言をいただいた。記して厚く御礼申し上げる。

——信州大学助教授——